

かたみとて何か残さむ春は花  
山ほととぎす秋のもみじ葉

良寛

今年も夏の暑い季節がやってきます。七、八月のこの時期は、お盆とともに、近隣のお寺では大施食会（おせがき）法要が営まれ、多くの方々がそれぞれのご先祖さま、また有縁無縁のご供養に参詣されます。亡き先祖に思いをはせるこの風景は、うだるような夏の暑さの中に、心の中を涼風が吹き抜けるような爽やかさを感じさせてくれます。このように、四季ごとに雛祭り、鯉幟、七夕、秋祭りといった行事やお祭り、宗教行事、さまざまな習慣が私たちの周りを囲み、心の安らぎと豊かさをもたらしてきました。

しかし、文明の発展や社会情勢のめまぐるしい変化の中にあって、現代に生きる私たちは本来あるべき自然の姿を心に留め、その移ろいを楽しむ余裕を失っているように思えます。その結果、私たちは伝統的な宗教行事のみならず、人間として大切な慈しみの心や、大切な倫理観さえも忘れ去られてしまったのではないのでしょうか。

冒頭の句は、良寛さんの辞世の句として知られているものです。そこから「形見として何ら残すべきものはなく、ただ四季のそれぞれの移ろいと風情が在るだけです」すなわち、自然にまかせ、自然とともに生きていくことが仏法そのものであるという良寛さんの教えが読みとれます。

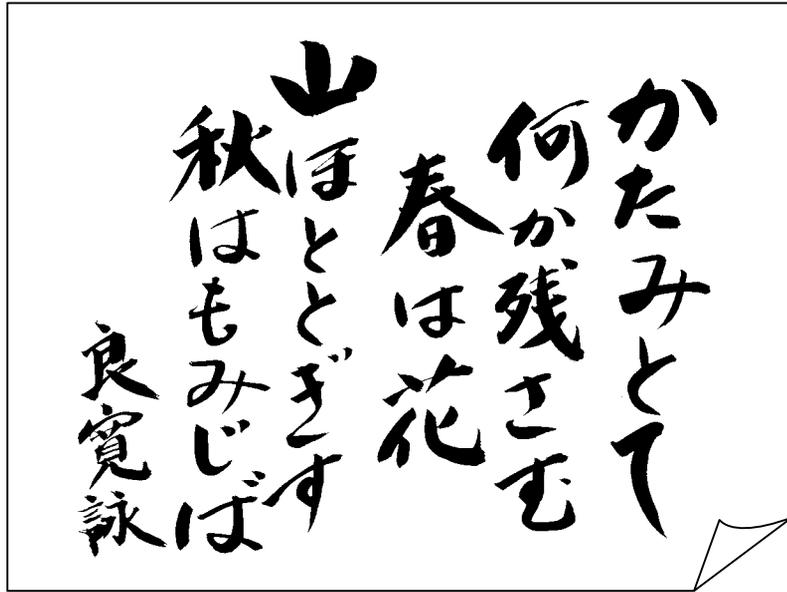
今年の春は思いがけない速さでやってきましたが、それでも草花は逆らうことなく、見事に芽吹き、花を咲かせています。そのような素直なところが、私たちに最も必要なことであるのだと思います。

四季の変化に心を留め、鳥のさえずり、綻ぶ花々、風の揺らめきに触れてみましょう。一つひとつの自然の姿を、人間本来のあるべき姿、大切な事をゆつくりと見つめ直した時、きっと新しい世界が見えてくるはずです。

表題の句は、日本の豊かな季節の推移と風光とを淡々と詠んだものです。けれども、その奥には道元禪師が『学道用心集』の中で「学人の第一の用心は先（ま）ず我見を離るべし」と説かれたように、「本来の面目」すなわち、何のこだわりもない、きわめて日常的なものが真の仏道を実現するものであることをありのままに表現しているといえます。

ノーベル賞作家・川端康成は「美しい日本の私」と題して、日本の禅僧の直観とその瞑想についてとりあげ、伝統的な日本精神の真髓を語りました。「本来の面目」・・・そのような境地に達すれば、もはや「我」などというものはなく、おのずと「無」とか「空」という境地に通じ合うものであるということです。

なお、「夏ほととぎす」とする説もありますが、ここでは良寛記念館の資料に基づき「山ほととぎす」としました。



## 曹 洞 宗

神奈川県 第二宗務所

第五教区 布教部・出版部